

自己評価との関連から見た大学生の友人間における サポートの授受関係について：「求め」「受け取 り」「求められ」「提供」の4側面からの検討

森, 久美子
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/15698>

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.207-216, 2005-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



自己評価との関連から見た大学生の友人間におけるサポートの授受関係について¹⁾

—「求め」「受け取り」「求められ」「提供」の4側面からの検討—

森 久美子²⁾ 九州大学大学院人間環境学府

The relationship between self-evaluation and giving-receiving relationships of support in friendships

Kumiko Mori (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

This study considered an individual as a support receiver as well as provider, and adopted four kinds of support: "request," "receiving," "being requested," and "providing." The purpose of this study was to examine the relationship between self-evaluation and giving-receiving relationships of support in college student's main friendships. Self-evaluation had two sets of standards: social value and personal value. Main results were as follows: (1) A difference in relationships between self-evaluation and "request" and "receiving" was found. "Request" was related to constructing good friendships, but it was also related to negative self-evaluation. Only males who had higher "receiving" scores showed higher self-evaluation scores on the standard of social value. (2) A similar relationship between self-evaluation and "being requested" and "providing" was also found. Those who had higher "being requested" and "providing" scores showed higher self-evaluation scores on both standards of social and personal value. Future studies will need to examine the effects of support while taking into consideration the fact that all the four kinds of support showed different relationships with self-evaluation.

Keywords: college students, friendships, social support, giving-receiving relationships, self-evaluation

はじめに

対人関係は、人を困難な状況に陥れる要因となる場合もある。一方で困難な状況を乗り越えるための力となる場合もある。これまで、生活上の様々なストレスがもたらす心身の悪影響を緩和する対人関係としてソーシャル・サポートという概念が用いられ、多くの研究がなされている(福岡・橋本, 1997; 嶋, 1992; 浦, 1992)。ソーシャル・サポートの定義は研究者によって多様であり、合致した定義がないのが現状であるが、近年、個人をサポートの受け手であると同時に送り手として扱う観点の必要性が指摘されている(蜂屋, 1990)。すなわち、ソーシャル・サポートを個人が援助の受け手とも送り手ともなって相互に他者で行うやりとりである、と捉える視点である。本論文ではこのような視点から、日常の人との関わりにおいて、個人は人に支えられたり支えたりするものであり、そのような相互的な「助け合う関係」とし

てのソーシャル・サポートに注目する。

問題と目的

サポート関係

他者とのサポートの授受関係という点から検討した研究として、サポートの互惠性とネガティブな効果を扱ったものがある。福岡(2003)によると、ソーシャル・サポートの互惠性とは『励ましや助言、具体的な助力など相手を支えるような行動(サポート)を、身近な他者から「してもらおうこと」と身近な他者に「してあげること」のバランス』と説明され、衡平理論の考え方が適用される。衡平理論とは、2者間の相互作用における一方の投入と成果の比率が他方のそれと衡平な状態が望ましく、不衡平な状態であると不公正感が生じ、緊張や不満が生じるというものである。これを応用しソーシャル・サポートの場合でも、サポートの受け取りと提供のバランスがとれている状態が心理的に好ましいという基本的な仮説が推定されている。先行研究においても、受け取るサポートと提供するサポートが不均衡の場合には、感情状態や心身の健康への悪影響が起きるなど、不適応、自尊心との関連が示されている(佐々木・島田, 2000; 福岡, 1997; 周・深田, 1996)。その際、過剰利得(受け取り>提供)

¹⁾ 本研究は2003年度九州大学教育学部に提出した卒業論文の一部を大幅に加筆修正したものである。

²⁾ 卒業論文作成にあたりご指導いただきました九州大学野島一彦先生、ならびに本論文作成にあたりご示唆をいただきました同じく九州大学福岡留美先生、田嶋誠一先生に心より感謝申し上げます。また、多くの助言をいただきました先輩方、調査にご協力いただきました対象者の皆様にも厚くお礼申し上げます。

の場合には罪悪感や負債感が、過小利得(受け取り<提供)の場合には不公平感や負担感が高まることが報告されている。

また周・深田(1996)は、サポートを受け取ることと提供することというサポート行動の互惠性だけでなく、サポートを求めることと求められることの互惠性から心身の健康までのパス図式を検討し、どちらの場合も授受関係の不均衡が個人のネガティブな感情状態を引き起こし、その感情状態が心身の健康に影響を及ぼすというパスを示した。サポート行動が実際に起こる前にはその前提として自身がサポートの受け手の場合には助けをもらいたいという要求が、送り手の場合には助けを求められるといった要求がなされると考えられる。そして、その要求に応じてのサポートか否か、もしくはサポート行動の前提にサポート要求があったかどうかということはそのサポート効果に影響を及ぼすと考えられる。そのため、サポート要求とサポート行動という一連の流れすべてをもって、個人のソーシャル・サポートの営みとみなすことが適切であろう。つまりサポート効果は、サポート要求も考慮したサポート行動が生起する文脈の中で検討することが必要と思われる。しかし、これまでのサポート研究では、サポート行動の実際の授受(サポートを受け取ること、提供すること)、もしくは授受の期待(サポートを受け取れるだろう、提供できるだろう)という次元での検討がほとんどであった。その中で、サポート要求(求めること、求められること)を考慮した周・深田(1996)の研究は意義深いものと言えよう。

しかしながら、周・深田(1996)はサポートを求めたり求められたりすることのバランスの衡平さにのみ注目し、心身の健康との関連を検討しているが、個人が他者にサポートを求めるという行為、もしくは他者にサポートを求められるという行為それ自体が個人の心身とどのような関連を持つのかということは検証されていない。だが、一個人にとってサポートを求めること、求められることが心身の健康や感情状態と同様な関連を示すとは限らない。これは、サポートを受け取ることと提供することについても同様のことが言えると思われる。これまで、サポートを受け取ることと単独と個人の心身の健康状態との関連を検討した研究は多くなされている。またサポートを提供することで低下した自己評価を回復する可能性を示唆した研究がいくつかなされており(嶋, 1992; 清水, 1994)、それらの結果からサポートを受け取ることと提供することは個人の心身にとって質的に異なった効果があることが推測される。すなわち、サポートを求めること、受け取ること、求められること、提供することは、一個人のサポートの営みであるが、それぞれのサポート側面が個人の心身の健康と一律の関連を示すものとは言えず、それぞれの側面を比較した上で、各側面と心身の健康との

Table 1
対人関係におけるソーシャル・サポート 4 側面

サポートの受け手	求めるサポート(求め)
	受け取るサポート(受け取り)
サポートの送り手	求められるサポート(求められ)
	提供するサポート(提供)

関連についての検討することが必要と思われる。そこでまず本研究では、一個人が行うソーシャル・サポートを「求め(受け手・期待)」、「受け取り(受け手・行動)」、「求められ(送り手・期待)」、「提供(送り手・行動)」の4側面に分け、4側面各々の特徴を心身の健康との関連から検討する(Table 1 参照)。その際本研究では、心身の健康に關係する大きな要因の一つとして自己評価に注目し検討することとする。

自己評価

自己評価とは、基本的には、個人の自己の価値や能力についての評価を指し、自分自身についての感じ方を意味する(遠藤, 1992)。そしてそれは、個人の様々な体験の中で作り上げられていくものなので、一生涯をかけて変容する可能性を持っているものである(溝上, 1999)。時に今までの自己評価が揺さぶられるような他者との体験をしながら、最終的に適切な自己評価を抱くようになっていくことが重要と考えられているが、過度な揺さぶりにより自分は価値がないと感じるような状況が続くと、個人の心身に様々な弊害が生じると報告されている(溝上, 1999)。このように、人は常に他者との関わりの中で生きており、他者の存在は欠かせないものであるため、自己評価の形成と対人関係との関連は重要であると言える。

自己評価の研究において、Rosenberg(1965)はその評価基準を、自分を「とてもよい(very good)」と考える場合と「これでよい(good enough)」と評価する場合に分けて捉えた。前者は社会が共有する理念に照らし、自分の考えや能力、社会的地位と他者を比較して相対的に自分の存在価値を評価する社会的価値を反映するものであり、後者は個人の信念や理想に基づいて個人内の価値を反映したものであり、「あるがままの自分」を受容していくという自己受容ともいえる。その上で、Rosenberg は後者の価値を真の自己評価として採用し、それに基づいて質問紙を作成しており、今日この尺度は広く用いられている。

一方、早くから社会の中での自己の立場に注目していたのが James(1890)である。James(1890)は自己評価を社会的自己(人が仲間から受けていると思っている評価・評判や名声をさす)に伴う、他者から認められ、自分が

価値のある、尊敬されるべき、優れた人間であるという感情であるとし、個人の重要な行動領域での社会的成功で個人の自己評価が捉えられると指摘している。また、Sullivan(1953)は、人間関係の相互の過程を強調し、他者がどのように自分を気遣っているかが、自分自身の評価の成分になると考えている。このような社会的承認や地位、重要な他者によって提供される社会的準拠枠の条件などが自己評価の評価基準になるという考えに基づいた尺度も作成されている(Coopersmith, 1967; Ziller, et, al 1969)。

更に、井上(1992)は従来の自己評価尺度を比較し、各尺度によって自己評価の定義、及び含まれる次元や要因に共通する部分もあれば異なる部分もあることを指摘している。つまり、従来の尺度は、研究者によって評価の基準を社会的価値と個人内の価値のいずれかに重きを置き、それに基づいて作成されていると言える。加藤(1977)は、一般的な社会的基準と自分の設定した基準というものが自己にもたらす意味が異なることを指摘している。また、遠藤(1992)は安定した自己評価のためには、自分自身、及び他者からの尊敬を共に必要としていると唱えている。

筆者は、社会的価値基準と個人内の価値基準は個人の中でともに独立して存在し、更にそのどちらもが個人が自己の存在の価値をはかるにあたり重要なものであると考え、社会的価値基準、個人内価値基準を共に考慮して自己評価を検討する。先述のように、既存の尺度はどちらかの基準に偏っているため、本研究では新たに2つの基準を含んだ尺度を作成することとする。

大学生の友人関係

ところで、青年期にあたる大学生は親から分離・自立し、家族以外の社会の中での相互関係を通して、それまで主に親や教師など周囲の人から得た価値観を疑問視し、自らの価値観を模索していき、自我の再構成をはかることが課題とされている。その過程において、特に同世代の親密で相互的な友人関係の重要性は多くの研究で指摘されていることである(松井, 1996)。

先行研究において、大学生の友人間のソーシャル・サポートは求めた程度に応じて受け取り、求められた程度に提供すること、また「求め」と「求められ」の間および「受け取り」と「提供」の間に高い相関が認められ、かなり互恵的なサポートが行われていることが確認されている(周・深田, 1996)。一方で、青年は自分をサポートの受け手というよりもむしろ送り手として知覚しているという先行研究(佐々木・島田, 2000)や、青年期では対人的価値として、仲間から頼りにされたり注目されることを重視するという知見(宗方, 2000)がある。すなわち、大学生は友人間で4側面のサポートを同程度にやっ

ているが、それぞれのサポートに対する捉え方や重要度が異なっていると思われるので、自己評価との関連も異なってくると推測される。そこで、本研究では大学生の友人間のサポート関係に注目することとする。

本研究の目的

以上から、本研究ではまず社会・他者との比較、及び個人内の比較による自己の価値評価を有した自己評価測定尺度の作成を第1の目的とし(第1研究)、次に大学生の友人間で生じる4つのサポート側面(「求め」、「受け取り」、「求められ」、「提供」)と自己評価との関連から各サポートの特徴を見出すことを第2の目的とする(第2研究)。また先行研究において、女子のほうが男子よりもサポートをより多く受けていることが示されていることから(嶋, 1992; 和田, 1989)、サポートと自己評価との関連についても性差があると推測できる。よって、本研究では性差を考慮して検討する。

第 1 研究

方 法

1. 質問紙の構成

自己評価測定尺度 既存の自己評価尺度や自己受容尺度、及び関連文献などを参考にし、社会的価値基準と個人内価値基準からなる自己評価が共に含まれるとした筆者の自己評価基準の視点から、項目を作成した。その後、心理臨床学専攻の大学院生3名(修士課程1名、博士課程2名)により項目内容の適否が吟味され、項目の削除あるいは改良を加え、最終的に30項目を質問項目として採用した。

2. 調査対象と調査期間

A県内の大学生638名を調査対象者とした。そのうち欠損値などデータに不備があった25名を削除した613名(男子298名、女子306名、不明9名、平均年齢19.92歳)を分析対象者とした。有効回収率は96.1%である。調査は2002年11月下旬から12月初旬にかけて、大学の講義を利用して行われた。

結 果

1. 不良項目のチェック

各項目の回答について、“あてはまらない”を1点―“あてはまる”を4点として4件法で得点化した。また、平均値±標準偏差の値が尺度の上限値を越えた5項目は、データの分布に天井効果の見られたものとして除外した。フロア効果は見られなかった。

Table 2
自己評価尺度因子分析結果(一般化された最小二乗法・バリマックス回転)

項目	I	II	III	h^2
第1因子 個人内価値基準				
20 私は困難にぶつかってもそれを克服できる	.706	.216	.135	.477
27 私は自分の目標をやり遂げられる	.703	.267	.078	.484
11 私は自分のことは自分で解決する自信がある	.617	.102	.137	.368
23 私は将来何が起ころうと自分なりにやっていける	.579	.164	.197	.356
21 私は自分にあったライフスタイルを持っている	.552	.099	.200	.326
3 私は自分で決めたことに責任を持つ	.547	.117	-.004	.288
第2因子 社会的価値基準				
7 私はほとんどの人から、まあまあ魅力的だと思われる	.008	.683	.165	.396
4 私は他者に好かれやすい	.158	.677	.016	.410
24 私の性格は好ましいほうだと思う	.289	.645	.141	.471
25 私は人から尊敬されるような人間になるだろう	.235	.637	.084	.411
26 私をよく知っている人なら私のことが好きだ	.227	.547	.059	.333
5 私は人に比べて能力などの点で優れていると思う	.172	.528	.228	.360
第3因子 否定的自己評価				
17 私は人をうらやましく思う*	.154	.053	.712	.408
12 私は人より劣っていると感じることもある*	.062	.130	.641	.354
9 私の容姿には変えたいところが多い*	.085	.016	.590	.298
1 私は今の自分に不満である*	.055	.135	.525	.293
10 まわりの人はみな私より立派である*	.160	.172	.519	.286
8 私はよく、小さなことをくよくよと考えてしまう*	.156	.098	.465	.242
因子寄与率(%)	14.7	14.3	12.6	41.6

注 1) *は逆転項目

2. 因子分析に基づく項目の選定と因子の命名

不良項目を除いた25項目について因子分析(一般化された最小2乗法, バリマックス回転)を行った結果, 3因子解を適当と判断した。バリマックス回転後の因子負荷量が,.40以下のものを除外して, 再度同じ手法を用いて分析にかけた。最終的に, 各因子の項目数を合わせるために, それぞれ因子負荷量の高い項目から6項目を取り出し, 計18項目を用いて「自己評価測定尺度」とした。このとき3因子による累積説明率は41.6%であった(Table 2)。

各因子を解釈すると, まず第1因子では「困難にぶつかってもそれを克服できる」, 「自分のことは自分で解決する自信がある」, 「将来何が起ころうと自分なりにやっていける」などの項目が含まれている。これらは, 社会や他者との比較による優劣に関係なく, 自分が設定した価値基準に照らして現在の自分を受容し, 自身の能力や可能性への信頼を示していると考えられる。つまり, これまで Rosenberg(1965)が真の自己評価と提唱した「こ

れでとよい」と感じる自己へ評価と一致すると言えよう。よって第1因子は「個人内価値基準評価」因子と命名された。

次に, 第2因子では「人に比べて能力などの点で優れていると思う」, 「人から尊敬されるような人間になるだろう」などの項目が含まれている。これらは, 周囲の人々と比較して自分の能力に自信を有している, いわば自負心に関する内容を示していると考えられる。また, 「ほとんどの人から, まあまあ魅力的だと思われる」, 「他者に好かれやすい」などの項目が含まれている。これらは, 自分が周囲の人々と良好な関係を築いており, それだけの魅力を有しているという感じを示していると考えられる。Coopersmith(1967)は社会的な価値を感じ評価する際には, 他者と比較した自身の有能さ, 及び友人・仲間内での自己の魅力や信頼感があるとする自身の有意義さの2点が存在するものとしている。よって, その2点を含んだ第2因子は「社会的価値基準評価」因子と命名された。

第3因子では「今の自分に不満である」「よく小さなことにくよくよと考えてしまう」「人をうらやましく思う」などの項目が含まれている。これらは自己の否定的な部分への評価を示していると考えられる。よって第3因子は「否定的自己評価」因子と命名された。

3. 信頼性の検討

各因子のクロンバックの α 係数を求めたところ、第1因子は.80、第2因子は.81、第3因子は.75であった。従って、各因子ともに十分な信頼性が得られた。

考 察

第1研究では、自己評価をする際にその評価基準として、社会的な価値基準と個人内の価値基準を用いるものとして、それに基づいた自己評価尺度を作成した。因子分析を行った結果“社会的価値基準評価”“個人内価値基準評価”“否定的自己評価”の3因子が見出された。肯定的な自己評価は、社会的な価値基準に基づくものと個人内の価値基準に基づくものの2因子で構成されたが、否定的な自己評価はひとつの因子で構成された。 α 係数の分析結果は、自己評価測定尺度が下位側面および全体として十分な内的統合性をもつことを示していた。

否定的な自己評価の側面がひとつの因子として抽出されたことについて考察する。三田(2000)はRSEの因子分析の結果、Rosenberg(1965)の尺度から3因子が確認されたことを報告している。井上(1992)でもRosenberg(1965)の尺度から2因子、Coopersmith(1967)の尺度からは6因子が抽出されており、それらの因子の中には否定的な自己評価の側面がひとつの因子として独立して存在している。更に、溝上(1999)は自己を評価する上で、ポジティブな側面とネガティブな側面は一次元上の対極にあるのではないことを示唆している。本研究の結果でも、否定的な側面がひとつの因子として独立して抽出されたのはこの見解を支持していると考えることができよう。

しかし、否定的な自己評価の際には、社会的価値と個人内の価値という評価基準によって因子が分かれなかった。これは溝上(1999)が指摘するように、否定性次元がそのまま「否定性」になる場合もあれば、「肯定性の欠けた状態」、「肯定性の対極」になる場合もあるという複雑な構造をしていることが理由の一つに挙げられ、項目選別の際に、否定性次元の自己評価の複雑な構造を踏まえたより詳細な検討が必要であったものと思われる。一方で、これまでも幼少期の重要な他者、特に親との関係で、自己を尊重されるような経験が自己評価に重要な意味を持つことはしばしば指摘されており(Sullivan, 1953など)、個人内の価値基準も幼少期からの親など周囲

の大人との関わりを通して、他者の持つ価値を根底につくられたものといえる。そして成長に伴う発達や関わる社会の拡大によって、社会の準拠枠での良い・悪いとされているものを、実際に個人が活動する際に良いか悪いか判断し、時には親と対立するような自身の信念に基づいた価値基準を分化させていくと考えられる。そのため、個人内の価値基準においても他者との関わりは拭い去れるものではなく、自己を確立していく段階である大学生では、より複雑な構造の否定性次元においては2つの基準が個人の中で混在している可能性も考えられる。しかし、その検証のためには、それぞれの評価基準ごとのより明確な否定的自己評価の質問項目の選定を前提として、更に異なる発達段階においてどのような因子で尺度が構成されるか検討することが必要であるだろう。

第 2 研究

方 法

1. 質問紙構成

ソーシャル・サポート測定尺度 福岡(2001)の尺度を基に本研究に適切な表現に改めた。全12項目に対して最近3ヶ月の間に4側面(「求め」、「受け取り」、「求められ」、「提供」)のソーシャル・サポートがどの程度あったか、「全くなかった(1点)」—「非常にあった(4点)」までの4件法で回答を求めた。

自己評価測定尺度 第1研究で作成したものを使用する。「あてはまらない(1点)」—「あてはまる(4点)」4件法で回答を求めた。

2. 調査対象と調査期間

第1研究と同様である。

結 果

1. ソーシャル・サポート得点の検討

ソーシャル・サポート4側面の指標間の関係を検討するために相関分析を行った。その結果、4側面のソーシャル・サポート得点間の関係についてはすべてにおいて、非常に高い正の相関が見られた($r=.73\sim.89$, $p<.001$)。すなわち、「求め」・「求められ」の間あるいは「受け取り」・「提供」の間、および「求め」・「受け取り」の間、「求められ」・「提供」の間に高い相関が見られたということが示された。

更に、性別を独立変数、ソーシャル・サポート4得点を従属変数として一元配置の分散分析を行った。その結果、「求め」、「受け取り」、「求められ」、「提供」すべてにおいて性別による主効果が有意であった(順に $F(1,602)=19.57$, $p<.001$; $F(1,602)=16.59$, $p<.001$; F

(1,602)=9.15, $p<.01$; $F(1,602)=4.90$, $p<.05$)。いずれも女子の方が男子に比べて、サポートの授受を4側面ともより積極的に行っていることが示された。

2. ソーシャル・サポート4側面と自己評価との関連

サポート4側面それぞれの得点の平均値をカットオフ得点として高得点群(H群)と低得点群(L群)に分け、各サポート得点H/Lと性別を独立変数、自己評価得点を従属変数とする2要因の分散分析を行った。なお自己評価得点は、各因子ごとの合計得点をそれぞれ「社会的価値基準評価」得点、「個人内価値基準評価」得点、「否定的自己評価」得点とし、及び全項目の合計得点を自己評価総合得点として、その4得点からみる。

「求め」得点H/L×性別 まず、サポートの「求め」得点における自己評価得点の差の検討を行った(Table 3)。自己評価のいずれの得点についても、H/L×性別の交互作用は見られなかった。「社会的価値基準評価」得点において「求め」得点のH/Lの主効果が見られ($F(3,591)=8.76$, $p<.01$)、「否定的自己評価」得点において「求め」得点のH/L、及び性別の主効果が見られた(順に $F(3,591)=16.11$, $p<.001$; $F(3,591)=22.78$, $p<.001$)。自己評価の総合得点においては性別の主効果が見られた($F(3,591)=5.85$, $p<.05$)。「求め」H群の方がL群よりも「社会的価値基準評価」得点が高く、L群の方がH群より「否定的自己評価」得点が有意に低かった。なお「否

定的自己評価」得点は、得点が高い方が自己を否定的に見ていないことを意味する。また、性差については、いずれも男子の方が女子よりも自己評価得点が有意に高かった。「個人内価値基準評価」得点においては有意な差は見られなかった。

「受け取り」得点H/L×性別 次に、サポートの「受け取り」得点における自己評価得点の差の検討を行った(Table 4)。「社会的価値基準評価」得点においてのみH/L×性別の交互作用が見られ($F(3,591)=5.20$, $p<.05$)、更に「受け取り」得点のH/Lの主効果がみられた($F(3,591)=13.52$, $p<.001$)。下位検定を行ったところ、男子において、「受け取り」H群の方がL群よりも自己評価得点が0.1%水準で有意に高いことが示された($MSe=10.54$, $p<.001$)。また、「否定的自己評価」得点、及び自己評価の総合得点において性別の主効果が見られた(順に $F(3,591)=26.60$, $p<.001$; $F(3,591)=6.74$, $p<.05$)。いずれも、男子の方が女子よりも自己評価得点が高かった。「個人内価値基準評価」得点においては有意な差は見られなかった。

「求められ」得点H/L×性別 次に、サポートの「求められ」得点における自己評価得点の差の検討を行った(Table 5)。自己評価のいずれの得点についても、H/L×性別の交互作用は見られなかった。「個人内価値基準評価」得点、及び「社会的価値基準評価」得点において「求められ」得点のH/Lの主効果が見られ、(順

Table 3
「求め」得点における自己評価得点の平均値と標準偏差及び二要因の分散分析結果

因子	性別 「求め」得点	男		女		主効果(F 値)		交互作用
		H	L	H	L	性別	H/L	
個人内価値基準評価	M(SD)	17.59(3.33)	17.33(3.61)	17.42(2.77)	17.13(3.58)	n.s.	n.s.	n.s.
社会的価値評価基準	M(SD)	15.02(3.34)	14.18(3.46)	14.91(3.12)	14.15(3.05)	n.s.	8.76**	n.s.
否 定 的 自 己 評 価	M(SD)	13.41(3.52)	15.07(3.81)	12.50(3.38)	13.19(3.33)	22.78***	16.11***	n.s.
自己評価総合得点	M(SD)	45.86(7.37)	46.53(8.32)	44.81(7.17)	44.50(8.10)	5.85*	n.s.	n.s.

* $P<.05$, ** $P<.01$, *** $P<.001$

Table 4
「受け取り」得点における自己評価得点の平均値と標準偏差及び二要因の分散分析結果

因子	性別 「受け取り」得点	男		女		主効果(F 値)		交互作用
		H	L	H	L	性別	H/L	
個人内価値基準評価	M(SD)	17.93(3.20)	17.05(3.67)	17.36(2.81)	17.23(3.46)	n.s.	n.s.	n.s.
社会的価値評価基準	M(SD)	15.42(3.11)	13.84(3.52)	14.77(3.07)	14.40(3.15)	n.s.	13.52***	5.20*
否 定 的 自 己 評 価	M(SD)	14.05(3.61)	14.59(3.89)	12.53(3.43)	13.07(3.29)	26.60***	n.s.	n.s.
自己評価総合得点	M(SD)	47.18(6.79)	45.47(8.67)	44.67(7.15)	44.70(7.93)	6.74*	n.s.	n.s.

* $P<.05$, ** $P<.01$, *** $P<.001$

Table 5
「求められ」得点における自己評価得点の平均値と標準偏差及び二要因の分散分析結果

因子	性別 「求められ」得点	男		女		主効果(F 値)		交互作用
		H	L	H	L	性別	H/L	
個人内価値基準評価	M(SD)	18.04 (3.32)	16.98 (3.56)	17.54 (2.78)	17.02 (3.47)	n.s.	8.48**	n.s.
社会的価値評価基準	M(SD)	15.39 (3.15)	13.89 (3.50)	14.91 (3.12)	14.23 (3.06)	n.s.	16.91***	n.s.
否定的自己評価	M(SD)	14.08 (3.80)	14.53 (3.75)	12.57 (3.30)	13.02 (3.44)	26.64***	n.s.	n.s.
自己評価総合得点	M(SD)	47.33 (7.55)	45.37 (8.11)	44.96 (7.05)	44.36 (8.11)	7.20**	4.10*	n.s.

* $P<.05$, ** $P<.01$, *** $P<.001$

Table 6
「提供」得点における自己評価得点の平均値と標準偏差及び二要因の分散分析結果

因子	性別 「提供」得点	男		女		主効果(F 値)		交互作用
		H	L	H	L	性別	H/L	
個人内価値基準評価	M(SD)	17.64 (3.40)	17.09 (3.63)	17.59 (2.83)	16.62 (3.67)	n.s.	6.94**	n.s.
社会的価値評価基準	M(SD)	15.03 (3.14)	13.67 (3.76)	15.03 (3.03)	13.57 (3.07)	n.s.	24.85***	n.s.
否定的自己評価	M(SD)	14.16 (3.73)	14.48 (3.84)	12.74 (3.39)	12.87 (3.33)	26.63***	n.s.	n.s.
自己評価総合得点	M(SD)	46.83 (7.62)	45.23 (8.33)	45.36 (7.21)	43.11 (8.12)	7.27**	8.38**	n.s.

* $P<.05$, ** $P<.01$, *** $P<.001$

に $F(3,591)=8.48$, $p<.01$; $F(3,591)=16.91$, $p<.001$), 「否定的自己評価」得点においては性別の主効果のみが見られた ($F(3,591)=26.64$, $p<.001$)。自己評価の総合得点においては「求められ」得点の H/L, 及び性別の主効果が見られた (順に $F(3,591)=4.10$, $p<.05$; $F(3,591)=7.20$, $p<.01$)。いずれも, 「求められ」H 群の方が L 群よりも自己評価得点が高く, また男子の方が女子よりも自己評価得点が高かった。

「提供」得点 H/L × 性別 まず, サポートの「提供」得点における自己評価得点の差の検討を行った (Table 6)。自己評価のいずれの得点についても, H/L × 性別の交互作用は見られなかった。「個人内価値基準評価」得点, 及び「社会的価値基準評価」得点において「提供」得点の H/L の主効果が見られた (順に $F(3,591)=6.94$, $p<.01$; $F(3,591)=24.85$, $p<.001$)。また, 「否定的自己評価」得点において性別の主効果が見られた ($F(3,591)=26.63$, $p<.001$)。自己評価の総合得点においては「求められ」得点の H/L, 及び性別の主効果が見られた (順に $F(3,591)=8.38$, $p<.01$; $F(3,591)=7.27$, $p<.01$)。いずれも, 「求められ」H 群の方が L 群よりも自己評価得点が高く, また男子の方が女子よりも自己評価得点が高かった。

考 察

1. 自己評価との関連から見るソーシャル・サポート各側面

まずサポートの「求め」の側面については, 自己評価のいずれの得点についても, H/L × 性別の交互作用は見られなかった。更に, 「求め」H 群の方が L 群よりも「社会的価値基準評価」得点が高く, L 群の方が H 群よりも「否定的自己評価」得点が有意に低いという結果を得た。「社会的価値基準評価」得点が高いということは, 自身の有能さや他者から受け入れられている有意義さが高いことを示すものと考えられる。人にサポートを求めるという行為は, ある程度相手がそれに応えてくれると想定して行うものであり, 周囲の人に自分が受け入れられているという感覚がないと素直に表出できないものであると思われる。そのため, 頻繁にサポートを求めることができる人は, 自身を周囲に尊重され, うまく関係を築いているとみなしている傾向が高いことが推測される。

他方, 「求め」を多く行っている人の方が自分を否定的に評価する傾向も高いことが示された。原田 (1992) は, サポートを求めることが失敗・無能さ・劣等性を公にさらし強調することになると示唆している。そのため, 人にサポートを求める頻度が高いと, その人より能力や努力について否定的に評価する機会も増えると思われる。すなわち, サポートの「求め」をより多く行うということは, 集団に受け入れられている, 他者から尊重されて

いると自分を評価する一方で、周囲の人と自己を比較して、少なからず劣等感を抱く可能性も高いと推測される。また「求め」における「社会的価値基準評価」得点の高さは、自身を有意義とする感覚を強く反映していると考えられる。社会的な価値を評価する場合、一般に他者との比較評価とみなされるが、他者からの尊重という評価も重要な視点として存在するものと思われる。

また「求め」とは異なり、「受け取り」の頻度と否定的な自己評価とは関連が見られなかった。Fisher et al, (1982)は、実際の援助行動よりもそれを自分から必要としたか、あるいはどうして必要としたかといった個人の知覚レベルが重要となるとする、自尊心脅威モデルを提唱している。本研究でも、実際にサポートを受け取ることよりも、サポートを求めることに対して、個人は自己を低く評価したり、劣等感を抱きやすいことが示唆されたといえよう。

更に、サポートの「求められ」と「提供」の側面に関しては、自己評価との関連において同様の結果が得られた。すなわち、人に多くサポートを求められたり、実際にサポートを多く提供している方が、「社会的価値基準評価」得点、「個人内価値基準評価」得点、及び自己評価総合得点が高いというものである。サポートの「求められ」、「提供」というのはサポートの送り手としての立場のものである。これは先述のように、青年期では、対人関係で人から頼られることを重視するという知見(宗像, 2000)や、自らをサポートの受け手というより送り手として知覚しやすいという示唆(佐々木・島田, 2000)に関連するものと思われる。従来の研究では、サポートを受け取ることによる個人の心身の健康への影響が多く論じられてきたが、本研究の結果から、青年期においては、特にサポートの送り手としての機能と自己評価との関連について、より注目することの重要性が示唆されたと言えよう。

本研究の結果はサポート行動をすることが自己評価を高めるという先行研究(清水, 1994)の知見と一致するものである。更に本研究では、サポートの送り手として機能することが、「社会的価値基準評価」においても「個人内価値基準評価」においても自分の価値を高め、しいては全体的な自己評価の高まりに関連するというより詳細な示唆が得られたといえよう。また、サポート行動を実際に行うだけでなく、人からサポートを求められることが多い場合も、個人の自己評価が高いことが示唆された。また、4側面のサポート間に非常に高い正の相関関係が見られ、求めた程度に応じてサポートを受け取り、求められた程度に応じてサポートを提供していることが伺えた。これは先行研究(週・深田, 1996)とも一致するものであり、大学生の友人間におけるサポートの授受関係はバランスのいい状態であると考えられる。周囲か

ら頼られることで、集団の中での自分の価値を見出し、更にそれに応えて実際にサポートを実際に提供できることにより、自分の能力を確信する機会になるものと思われる。

2. 性差について

サポートの「求め」、「受け取り」、「求められ」、「提供」4側面すべてにおいて、男子の方が女子よりも「否定的自己評価」得点が有意に高く、男子が否定的に自己をより評価しない傾向にあることが示唆された。井上(1992)は大学生を対象とした研究で、社会的価値基準に重きを置いているもの、個人内の価値基準に重きを置いているものがある3つの自己評価尺度において、そのいずれでも男子の方が女子よりも自己評価の得点の平均値が有意に高いことを示している。また本研究では、価値基準が混在していると思われる「否定的評価」得点に性差があらわれている。井上(1992)の結果も踏まえると、大学生においては、価値基準の次元よりも自己の肯定的側面・否定的側面という次元において性差が見られることが示唆された。

また、サポートの「受け取り」の側面において、男子にのみ「受け取り」H群がL群よりも「社会的価値基準評価」得点が有意に高いことが示された。嶋(1992)は女子の方が男子よりもサポート関係を営みやすく、その背景として女子が援助を求め、受け取ることによって社会が寛容であると指摘している。本研究でも、女子の方が男子よりサポート4側面すべて積極的に行っていることが示されており、女子にとって友人とのサポート関係は男子よりも日常的なものであることが伺われ、サポートを受け取ることも自然なこととして認知されているのかもしれない。また、Barbee et al.(1993)は男性は社会化の過程で、サポートを求めることへのネガティブな圧力から、サポートを求める傾向が弱くなることを示唆している。つまり、男子はサポートの受け手としての自身に女子よりも敏感であることが推測される。そのため、男子におけるサポートの「受け取り」は、女子よりも意識付けられる出来事として、自己評価と顕著な関連が見られると思われる。また、男子の方が自己評価の総合得点が高いことから、サポートを実際に受け取ることによって良好な関係を築き社会的にうまくやれている感覚を顕著に抱き、サポートを求めることによる否定的な自己評価を補う側面を有しているのかもしれない。福岡(1997)は、男子が自身のサポートの提供力を高く認知することで自己評価を維持すると可能性を示唆しており、サポート4側面がそれぞれ単独ではなく相補的に総合的な自己評価を形成していと考えられる。

3. まとめと今後の展望

本研究では、一個人が行う他者とのサポートの授受を「求め」「受け取り」「求められ」「提供」の4側面に分けて捉え、それぞれが個人の自己評価とどう関連するかを詳細に検討した。その結果、サポートの受け手の立場である「求め」「受け取り」と、送り手の立場である「求められ」「提供」の次元で、自己評価との関連が異なることが示された。受け手の立場では、サポートを求めることが実際に受け取ることよりも自己を否定的に評価することと関連があり、特に男子において、「求め」に応じたサポートの「受け取り」が否定的な自己評価を補っていることが示唆された。また、「求められ」「提供」というサポートの送り手の立場が個人の自己評価の維持に関連することが示唆された。

これまでの研究では、サポートの受け取ることの効果のみが注目される傾向にあった。しかし、日常生活で個人はサポートの受け手とも送り手ともなってサポートの授受を行っている。その視点を考慮したものがサポートの互惠性の研究であるが、何の文脈もなしにサポートは生起するわけではなく、サポート要請からサポート行動までの文脈も考慮した検討が必要であるだろう。本研究でサポートの授受関係のそれぞれの側面は、自己評価と異なる関連を示し、しかしそれぞれ相補的な関係であることが示唆された。そのため、今後一個人のサポートの営みとしてサポート4側面全体の関係性を考慮し、4側面がどのようなバランスを取ることが個人の心身の健康とどう関連するのか検討していくことにより、サポート研究に新たな知見が得られると思われる。

引用文献

- Barbe, A. P., Cunnigha, M. R., Winstead, B. A., Dellega, V. J., Gulley, M. R., Yankeelov, P. A., & Druen, P. B. 1993 Effects of gender role expectations on the social support process. *Journal of Social Issues*, **49**(3), 175-190.
- Coopersmith, S. 1967 The antecedents of self-esteem. San Francisco: W. H. Freeman
- 遠藤辰雄 1992 セルフ・エスティーム研究の視座 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版.
- 遠藤由美 1992 個性化された評価基準からの自尊感情再考 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版.
- Fisher, J. D, Nadler, A & Whitcher-Alagna, S 1982 Recipient reactions to aid: A conceptual review. *Psychological Bulletin*, **91**, 27-54.
- 原田純治 1992 援助行動 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版.
- 福岡欣治 1997 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手と提供—認知レベルと実行レベルの両面から見た互惠性とその男女差について— 対人行動科学研究, **15**, 1-14.
- 福岡欣治 2001 ソーシャルサポート 堀洋道(監)・吉田富二雄(編) 心理測定尺度Ⅲ サイエンス社, 40-68.
- 福岡欣治 2003 ソーシャル・サポートの互惠性に関する考察—認知レベルと実行レベルの区別に焦点を当てて— 行動科学, **42**(2), 103-108.
- 福岡欣治・橋本宰 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, **68**, 403-409.
- 蜂屋良彦 1990 ソーシャル・サポートと適応 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 54-55.
- 井上祥治 1992 セルフ・エスティームの測定法とその応用 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版.
- James, W. 1890. *Principles of Psychology*. New York: Holt, Rinehard and wistom.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラム No.14 東京大学出版.
- 松井 豊 1996 親離れから異性との親密な関係の成立まで 斎藤誠一(編) 人間関係の発達心理 4 青年期の人間関係 培風館.
- 三田英二 2000 重視される自己の諸側面に影響を与える要因の発達の变化に関する一研究(2)—女子青年を被験者として, Rosenberg の Selh-Esteem 尺度からの検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **14**(2), 311-323.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論: 実証的心理学のパラダイム 金子書房.
- 宗像比佐子 2000 対人的価値 久世敏雄・齋藤耕二(監) 福富護他(編) 青年期心理学事典 福村出版.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent selfimage*. Princeton, NJ :Princeton University Press.
- 佐々木新・島田修 2000 大学生におけるソーシャル・サポートの互惠性と自尊心との関係 川崎医療福祉学会誌, **10**, 249-254.
- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, **7**, 45-53.
- 清水 裕 1994 失敗経験と援助行動意図の関係について—低下した自尊感情回復のための認知された援助の道具性— 実験社会心理学研究, **34**, 21-32.
- 周 玉 慧 1994 ソーシャル・サポート研究の概観 広

- 島大学教育学部紀要, **43**, 141-148.
- 周玉慧・深田博己 1996 ソーシャル・サポートの互恵性が青年の心身の健康に及ぼす影響 心理学研究, **67**, 33-41.
- Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory*. New York : W. W. Norton.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人: ソーシャル・サポートの心理学, サイエンス社.
- Ziller, R. C., Hagey, J., Smith, D., & Long, B. 1969 Self-Esteem: A self-social construct. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 84-95.